

山本 恭正

1. 事業実施の目的

博士論文作成にあたって 2007～2008 年以降実施できていない本格的な現地調査を再開し、世界遺産登録直後の熊野の語り部たちの実態を現在と比較し、その変化を具体的に把握すること。

2. 実施場所

和歌山県東牟婁郡古座川町、串本町、三重県尾鷲市、熊野市

3. 実施期日

2020年 3月 10日（火）～ 2020年 3月 14日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

調査対象は修士論文作成の際に調査を実施した三重県東紀州地域における熊野古道伊勢路語り部友の会と、和歌山県古座川周辺地域における大辺路刈り開き隊の語り部たちである。両地域は、広大なエリアにまたがる熊野の中でも、コミュニティとして文化遺産への関与が特に活発なエリアである。彼らの文化遺産実践にアプローチすることによって、現在の熊野における語り部たちの実態や、その全体像の把握が容易になると考えた。

調査においては、それぞれの語り部たちが観光ガイドとして案内する活動に同伴し、特にこちらから意図して働きかけたり質問したりすることは行わず、ひたすら一緒に歩くことで、語り部たちの日常的な実践にアプローチした。

その際、特に注目した事柄は、語り部たちの話す「文化」や「信仰」に関する言説である。自分たちの生活する地域が世界遺産に登録された価値、すなわち「文化」とは、一般的にどのようなイメージで使われているのか。それを解き明かす手がかりとして、東紀州地域の語り部たちの間で一時期使われていた「古道文化」と呼ばれる言葉がある。

「古道文化」は、熊野古道伊勢路の峠における地蔵や塚として現代の生活のなかに残るものとされており、語り部たちにとっての遺産にリアリティーを持たせる機能を備えている。報告者がこれまで調査研究の対象としてきた三重県東紀州地域における「熊野古道伊勢路語り部友の会」では、行政の主導の下、1996～1997年にかけて語り部を一元化した組織の形成が進められてきた。また、地域によって違いはあるものの、語り部として有料で観光ガイドだけに取り組んでいるわけではなく、多くの場合、無償で道の保全や清掃、見回りといったガイド活動に付随する活動も積極的にこなそうとしている。さらに彼らの役割は、その活動を通じて熊野古道の聖

性を形作ることも含む。その意味で、彼らの遺産マネージメントは、世俗的な側面と宗教的な側面の双方にまたがっていると考えられる。

本研究では、世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる三重県東紀州地域を対象とし、その地域に集まる語り部たちの言説を記録・分析する。そのうえで、そうした語り部たちの活動に影響されながら、地域に住む人々がもつ地域イメージや文化遺産イメージが修正を受けるプロセスを描きだし、語り部たちが世界遺産の現場ではたす役割を明らかにする。

今回の調査は、調査対象である語り部に対して、三重県東紀州地域では、ヒアリング調査 1 件、参与観察 2 件、和歌山県古座川周辺地域ではヒアリング調査 1 件、参与観察 1 件、合計 5 件の現地調査を実施した。

●本事業の実施によって得られた成果

2020年3月10日から2020年3月12日までは、三重県東紀州地域に滞在して熊野古道伊勢路語り部友の会や文化遺産と直接的・間接的に関わろうとする個人・コミュニティを対象として、調査を実施した。まず、世界遺産登録直後（2004年から2008年ごろまで）から現在までの大きな変化として、地域に語り部（ガイド）活動を実施する民間団体が生じたことは挙げられる。東紀州地域では、行政が一元化して語り部の組織化・育成を進めてきたが、民間に文化遺産と直接的・間接的な関わりを志向する大小様々な規模・形態のコミュニティが生じている。

平成28年度ふるさとづくり大賞個人表彰（総務大臣賞）を受賞した「くまの体験企画」の設立者は、行政が育成した東紀州の語り部組織の一員で、より広域で熊野に関わるコミュニティビジネスを手がけたいとの思いから、個人事業としても2008年2月から語り部ガイド活動を開始した。

熊野古道に隣接したエリアにトレイルコースが設置した「尾鷲藪漕（やぶこぎ）隊」は、藪に埋もれている道などを整備するボランティア団体として、古道や山のガイドなども行っている。三重県立熊野古道センターも彼らが整備した「尾鷲トレイル」を活用したトレッキングイベントを開催するなど、その活動を後方から支援している。

また、東紀州地域に点在する世界遺産に登録されていない信仰上のモノ・場所を媒介としたつながりも再活性化した。岩屋堂や荒神堂（日輪寺）は、世界遺産の直接的な構成資産に登録されていないが、地元で根付いた信仰実践が細々とではあるが地道に継続的に続けられてきた。2015年に岩屋堂が2019年に荒神堂が整備・再建され、世界文化遺産に登録されていない信仰要素を含むモノ・場所の価値が見直されている事例といえる。

文化行政も財政上の問題や近年の文化遺産をめぐる動向などからこうした傾向を後押ししているように見える。行政とコミュニティとの関わりはそれぞれのコミュニティの代表者が行政関係者、あるいは行政と緊密に連携が取れる人物であることから伺える。今後こうした小規模ではあっても主体的に文化遺産と関わりを持とうとする個人・コミュニティ・組織が行政と横の連携を持って、民間から高齢化・過疎化といった地方行政の難しい課題に一石を投じることが期待される。

観光面からみると、訪問者数は世界遺産登録直後からすると大分落ち着いてきたようだ。登録直後は、大型の観光バスがツアーを組んで、団体で大挙して押し寄せるような現象が見られたが、近年の傾向としては一人旅で訪れるケースが目立つそうだ。

一方、登録直後から変化していない点として、熊野古道（バッファゾーン・コアゾーン）の整備・保全における語り部・行政・住民の間にコンセンサスが取れていないと思われる点である。具体的な事例として、バッファゾーンにソーラーパネルを設置している箇所が増え、語り部たちが不満を感じていることなどがある。

さらに一部の世界遺産に登録された熊野古道のコースでは、高齢の語り部がほぼ一人で広大な距離・範囲の整備・保全・モニタリング（行政への報告）をボランティアで行っているケースもあり、事故防止や公益性の観点から、今後地域・エリア毎にある程度統一した基準を設ける必要がある。土地所有者との協議や地域社会全体の景観形成に合意を促す動きが遅れている背景には、文化遺産化・グローバル化に伴う変化を受け入れるための条件が十分満たされていない部分があると思われる。

2020年3月13日から2020年3月14日までは、和歌山県古座川周辺地域に滞在して熊野古道大辺路刈り開き隊のメンバーに対して、聞き取り調査と実際のガイドに同行する形で参与観察を行った。

古座川周辺地域の大きな変化として、2014年に南紀熊野ジオパークとして認定されたことと、2016年に世界遺産の追加登録がおこなわれたことの二点があげられる。

ジオパークとは、「その地域の大地のなりたちを知るだけでなく、歴史・文化・動植物・食などを通じて、大地と人の暮らしの関わりを実感して楽しむところ」であり、南海トラフ地震が予測される同エリアで、災害の記憶を正しく伝えていくことを目的として、和歌山県知事の仁坂吉伸が構想を立ち上げた。ジオパークの理念に共感する語り部は多く、和歌山県に留まらず、三重県側でも多くの語り部がジオガイドとして登録している。

世界遺産・追加登録については、2016年新田平見道、富山平見道、飛渡谷道、清水峠の4つのコース・峠が登録された。刈り開き隊代表の上野一夫は、「(世界遺産に登録された)12年前を振り返ると、(串本)町内の大辺路が世界遺産に登録されるなんて想像すらしたことがなく、まるで夢を見ているようだ」と述べている。

追加登録が達成されて以降は、地域共同の作業はほとんどなく、毎月行っているウォークイベントや世界遺産に登録されたコースのパトロール（二人一組で定点撮影と報告書）などが実施されている。串本観光協会ガイド部会では、刈り開き隊と共同で地域の新しい資源を発見して観光につなげるための企画・立案を行っているが、現在は司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズで知られ、2009年に朝日新聞の「行きたい街道日本一」に選ばれた古座街道に注目しているようだ。

世界遺産の構成資産ではないが、実際に古座川町峯集落の薬師堂・矢倉神社でガイドに同行させてもらった際、刈り開き隊隊員兼ジオガイドである女性は、「ガイド活動を通して一番伝えたいことは、生まれ育った地域の先人たちから受け継いできた生き方だ」と教えてくれた。厳しい自然環境の中で神様を信仰しながら生きてきた先人たちの民話や伝承を、絵本にして出版したこと

もあるらしい。ここでは文化遺産化がきっかけとなり、コミュニティが形成され、民俗学が従来対象としてきたような民話や伝承の意識的な掘り起しが行われ、地域を見直す機運が生じている。

また、近隣の和歌山県田辺市では 2005 年の合併に伴い、2006 年 4 月、田辺市内の観光協会（田辺・龍神・大塔・中辺路町・熊野本宮）を構成団体として、官民共同の観光プロモーション団体である「田辺市熊野ツーリズムビューロー」が設立された。特にインバウンド観光に力を入れ大きな成果を挙げており、観光に携わる多くの企業・団体からの視察が後を絶たない。ふるさと開発大賞 2020 年首相賞をはじめ、国際的な賞も受賞しており、口熊野と呼ばれ熊野地方の入り口でもあり、合併によって有名な文化遺産（熊野古道中辺路・熊野本宮大社・湯の峰温泉など）を多く抱えるエリアでもある地理的な立地を生かした文化行政の観光戦略が功を奏したものと思われる。

ここまで、三重県と和歌山県の熊野と呼ばれるエリアのなかでも、観光イメージや地域イメージの中心ではなく、周辺に位置すると思われる東紀州地域と古座川周辺地域で行ったフィールドワークの成果をまとめてきた。全体的な考察として、以前修士論文作成のために行った世界遺産登録直後（2004 年から 2008 年ごろまで）の調査と比べて以下のようにまとめられる。

- ① 行政主導の文化遺産化の盛り上がり終息し、民間から生じたコミュニティの活動が目立つ。
- ② 地域内の無名の聖地や自然といった地域資源の意識的な掘り起こしの動きが生じている。
- ③ 語り部たちのガイドに特化する傾向が進み、地域を巻き込む形での活動が減少している。
- ④ 田辺市熊野ツーリズムビューロー設立により、熊野を訪れる外国人観光客の増加が目立つ。

以上のデータから本事業の実施によって、修士論文研究の調査との大まかな比較、博士論文の作成にあたって理論的な方向性を検証することが可能となった。今後本事業によって得られたデータを基に、総合研究大学院大学「総研大フォーラム」での口頭発表、『文化科学研究』への論文投稿、東洋大学「白山人類学研究会」での口頭発表、『白山人類学』への論文投稿、新宮市主催の「国際熊野学会」での口頭発表、『熊野学研究』への論文投稿を視野に入れ、研究活動を進めていく。

●本事業について

文化人類学を専攻する大学院生にとって現地における調査研究や国内外の学会発表などの研究活動は非常に重要であり、報告者は初めて平成 31 年度地域文化学専攻・比較文化学専攻学生派遣事業の支援を受けて本格的にフィールド調査を再開することができた。この事業は非常に有益な事業であり、今度も継続して欲しい。